

## ●第3回「伊藤喜栄塾・地歴学講座」

平成25年8月10日  
「伊藤喜栄塾」運営事務局／今枝忠彦

### ■第2回講座概要

- ・出席者22名
  - ・講義 0. 前回の復習（基礎概念再考）
    1. 現代とは？ 金融資本主義とグローバリゼーション
    2. 地域問題とは？ 地域問題の二重性・二面性
    3. 日本の近代化、現代化の中での一宮
    4. 第二次世界大戦前の一宮の街づくり戦略 —先人の知恵—
    5. 地方中心都市一宮のルーツと三・八市
    6. 地方中心都市一宮の都市施設整備と毛織物業・関連起業の集積
    7. 毛織物業集積都市の衰退・解体と街づくり戦略の再構築  
—地方中心都市か、名古屋圏の有力衛星都市か—
  - ・意見交換
- ※「地歴学ノート No. 2」(p2～p6) 参照

### ■今後の日程（予定）

- ・10月から後期講座を再開します。第4回は、前期講義内容を振り返りながら、要点を再確認します。11月には、前期講義に関連したテーマで、伊藤先生とともに地域政策・まちづくりの専門家をお招きし、シンポジウム形式で特別講義を開催する予定です。

	講義テーマ
第1回：6月8日（済） 14:00～16:30	・「地歴学」について
第2回：7月13日（済） 17:00～19:00	・現代日本の地域問題と一宮① ：歴史から学ぶ
第3回：8月10日 14:00～16:00	・現代日本の地域問題と一宮② ：将来を展望する
第4回：10月5日（予定） 17:00～19:00	・前期講義おさらいと今後の展開
特別講義：11月2日（予定） 14:00～16:00	・「100年前の大転換期における一宮の地域形成戦略に学ぶ」（仮テーマ）
第5回 未定	・コミュニティ形成について（仮）
第6回 未定	・同上

（開催日は変更の場合があります。ご了承下さい。）

【講義】

0. 前回の復習(基礎概念再考)

(略)

1. 現代とは？ 金融資本主義とグローバリゼーション

- ・近代は、産業革命以降の産業資本主義を中心とした市場経済のメカニズム。現代は、資本主義社会の主体がものづくりから、金融資本に代わり、閉鎖型の一国経済を超え、グローバリゼーション化した。
- ・金融資本が出てくるのは、第一次世界大戦後、世界恐慌のころだが、現代といえるのは、社会主義国が消滅するベルリンの壁崩壊以後であり、これによって、金融資本は自分の思うように動かせるフィールドを持った。
- ・グローバリゼーションに対応する経済理論はない。閉鎖型の国民経済の前提とは枠組みが違っている。経済学者は、経済理論どおりに行動しない消費者が悪いという。新しい理論が必要である。

2. 地域問題とは？ 地域問題の二重性・二面性

- ・地域の具合が悪くなるというのが地域問題。area と region で異なる。実態に近い社会的空間が存在するという立場が後者で任意に切り取ればよいという立場が前者。どちらの地域を頭に置いて、地域問題を考えるのが大事である。
- ・area の場合は、スラムとかゼロメートル地帯とか、問題地域を抽出して、それに対応して手を打てばよい。地域格差ということにウェイトが掛かってくる。他と比べて平均以下のところが地域問題となる。数量的な較差が中心となる。
- ・一方、region の方は、まん中があって、周りに小さな固まり、あるいは多核心型でもいいが、こういう「空間的統合」(水平的統合ともいう)が上手くいっているかどうか地域問題となる。例えば、一宮市のバスに関して言えば、一宮を中心とした尾張北部の空間的統合の基礎を持っている。それが上手く運営されていれば評価に値する。それが、路線によって利用者数、運行頻度が大きく異なるようでは、全体のまとまりに欠け、市民は公平な選択ができないということで問題となる。
- ・また、地域問題の認識主体、つまり誰が問題とするのかということがある。資本主義社会では、人間が主人公ではなく資本である。アダムスミス以来、空間編成の主体は、産業であり、企業であり、資本である。これに異を唱えるには、相当のエネルギーが必要であり、労働運動、社会運動、市民運動となる。
- ・公的セクター、教育、マスコミも資本の方に顔を向けている。市場メカニズムが前提だから、カネを儲け、儲けたカネを基礎にすることを抜きにして社会の存立はない。たとえ対抗関係、運動があったとしても、ひっくり返ることはない。
- ・マルクスは『共産党宣言』で、「ブルジョアジーは自分の姿かたちに似せて世界をつくりかえる」と言ったが、資本は自分の利益になるところしかつくりかえないから、そうでないところは古いままで取り残され、それが較差につながり、あるいは空間的統合の良し悪しにつながってくる。マルクス、エンゲルスは、産業革命直後のイギリスを見ながら、後世のヒントになるようなことを分析し、提案している。それが、あまり読み返されていないのは残念である。
- ・地域問題という視点から、一宮駅周辺を見てみる。『デフレの正体』(藻谷浩介)という本では、一宮駅はじめ名古屋都市圏の有力な駅前がみな駐車場で悲惨であると批判している。しかし、東京圏と名古屋圏では通勤の形態が違う。名古屋圏ではパーク&ライドでないと市民の生活に支障が出るので、駐車場が増える。大阪圏でも、滋賀県の駅前が同じである。一宮に駅ビルができて、駅前の評価額が上がったそうなので、これまでのような駐車場が成り立つかどうか。どう変わるか興味深い。しかし、世界の先進国の中でも、駅前が商業施設で埋まるのは例外的である。パリもロンドンもベルリンも商業施設で埋まっていない。

### 3. 日本の近代化、現代化の中での一宮

- ・尾張藩の統治能力は高く、17世紀の終わりごろ、村をひとつひとつ調べて、人口、石高、特産物などを記録に残しており（資料は『寛文村々覚書』）、世界にも例がないと思われる。その中で、一宮（一之宮）は490世帯でほぼ3,000人の人口を数えた（寛文時代は1661年から1673年）。戸数が100を超えるところは少なく、一宮は突出して大きいことがわかる。
- ・関連図表の3ページの5。一宮は、戦国時代から、市町（マーケットタウン）として相当の地位にあった。世界的にも、多くのまちの起源はマーケットタウンである。大きな平野で物々交換の仕組みが完備してくるとマーケットタウンとなる。一宮では門前町が基礎となっている。
- ・6は一宮の人口規模、拠点性などを表している。一宮は江戸時代前から、濃尾平野の中心都市であった。1ページの2に都市の分類がある。私の分類では、普通の都市が地方中小都市、一宮はそれより少し大きくて地方中心都市。この地方中心都市は全国的には多くは県庁所在地となっている。仮に尾張県があれば、一宮は県庁所在地になる資格を持っている。
- ・それに対して、現代化の中でのポイントは、県庁所在地に成り得る資格を自覚することなく、産業都市に変わってしまったことにある。自覚を持って戦略という中で生きていけば、もっと違う産業都市に成り得たであろう。それをやり損なっているのではないかと思う。
- ・1980年代に、中小企業論の中で「サードイタリー論」が議論された。ミラノを中心に北イタリアに大企業、南に農村地帯、それに対してフィレンツェを中心とした中小企業の産地。それが「サードイタリー」として日本に紹介された。その時、毛織物のまちプラートと比較されたのが、毛織物の産地としての一宮。
- ・だから一宮は、80年代までは尾張の中心としてだけでなく、毛織物の看板を持っていた。それが社会主義が消え、世界がひとつになって行くころから、どんどん劣化していった。役所に企画マンがいなかったことが問題だったかもしれない。例えば、1960年代後半の新産業都市に関連して、三重県の臨海工業地帯にフォードを誘致しようと頑張った人がいた。そんな骨っぽい企画マンがいたところもある。

### 4. 第二次大戦前の一宮の街づくり戦略—先人の知恵—

- ・大戦前のまちづくりは、市当局、商工会議所、商店街の豪商なのかわからないが、ひとつの戦略を持っていたような気がする。地方中心都市としての自覚を持ってまちづくりがされたと思う。まず、1920年ころに市制を引いた。同時に女学校を作り、中学校（第6）を誘致した。また、東海道線に急行を停めたことは大きい。大阪商人が来られるように急行を停めた。当時の急行は、いまの快速とは格が違う。濃尾平野の中心にあって、名古屋は関係ないぐらいの自負があり、その中心性を盛り立てるような市政を行っている。
- ・小学生のころに、いまの近代的な本町商店街ができた。当時はハイカラな街並みだった。また、一宮から放射状に延びる県道の整備もこの頃である。1935年前後、世界恐慌対応の失業対策事業の中で1車線から2車線に拡幅された。舗装されたのは戦後。バスは1925年ころ、伊藤自動車という東一宮の緑のバスが濃尾平野の一番最初である。濃尾平野の中心都市として他とは違った都市に育てるという戦略があったように思う。

### 5. 地方中心都市一宮のルーツと三・八市

- ・尾張藩は、治水なども早く進められ、安定した生産力があり、農産物も村ごとに特色があった。一方で、尾張藩の主力は一宮ではない。2ページの3の図でわかるように、丹陽あたりの南の青物生産地帯が名古屋と関係が深い。また、尾張藩の商人は一宮あたりの繊維産業にあまり着目しておらず、知多半島の白木綿の方に力が入っている。知多半島の港から江戸に送れる。それと、柄ものの方が高級イメージを持っているが、江戸時代には、白ものでつくって、大都市で捺染で加工することの方が需要が大きかった。
- ・この地方が綿作地帯として全国的な知名度を持つ産地になったのは第二次世界大戦後だと思う。その前までは、各地にある中小の先もの売物の産地に過ぎなかった。尾張藩の庇護は受けていない。綿に加えて、北の養蚕、南の野菜などを荷車引いて集散するには三八市の位置はちょうどよかった。古知野の五・十市など、日を替えて定期市で取引を行い、そのセンターが一宮だった。

- ・ドイツでは、普通のマーケットタウンとそれより大きな「大市」（いわゆるメッセ）を行うところは区別されている。ハノーファー、ライプチヒとか、ブレーメンなどのメッセのまちが後にハンザ同盟を組織して、有力な商業都市になる。そのメッセに相当するものが一宮には成立していた。一宮の周りの小さなマーケットタウンが、一宮の本町商店街で仕入れている。つまり小売りと卸売りを同時にやっている。「大市」開催というのはそういう意味である。マーケットの範囲であるが、馬の背中に荷を乗せて、10km から 15km ぐらい。イギリスでも同じくらい。近代以前の伝統社会は似たようなものと理解してもらっていい。

## 6. 地方中心都市一宮の都市施設整備と毛織物業・関連起業の集積

- ・近代的な都市施設、電気、ガスなどをいち早く整備し、それが濃尾平野を世界有数の繊維産業に変えたと言える。一宮のみならず、西は大垣、南は四日市、東は江南にいたり、濃尾平野全体が繊維産業の大企業、中小企業で埋まった。これに匹敵するのはヨーロッパでは、イギリスのヨークシャー、ランカシャーぐらいしかない。それぐらい凄い産業集積である。
- ・工業地帯と違い、産業集積は自らが選んで工場を建てたという意味合いがある。なぜそうなったかを抜きにして産業集積を語っても意味が無い。アメリカの経営学者が言う *transaction cost*。つまり取引関係が能率よく高密度に発達していった。着尺物で毛織物を始めた一宮。作っているのは起、奥町で、大阪商人の影響が大きい。それが核となって、稲沢に栗原紡織（後の大同毛織）が出てくる。羊毛の輸入のために四日市港が整備される。名古屋港は天然の良港ではないので整備にカネがかかる。それで、四日市で荷揚げして、弥富へ。だから、尾西線は利用価値が高い。また、地下水は一杯あって染色にも有利。地方中心都市としての都市施設整備が結果的には濃尾平野の繊維産業集積の基礎となっていることはあまり指摘されていない。
- ・なぜ輸出産業にしなかったのか悔やまれる。フランス、ドイツは厚いものは得意だが、薄いものできるのはイタリアだけ。ここは、全世界で5番目ぐらいの毛織物の産地。イタリアのプラートは、低賃金労働者として中国人を入れたが、これが裏目に出ていますっかりダメになった。こっちは外国人を入れなかった。イギリスはパキスタン、インド、バングラディッシュの旧植民地の人間を入れた。日本の移民政策は、ブラジルの日系人は入れた、社会的にはバランスしているが、産業面では後手を踏んだかもしれない。
- ・余談になるが、かつての尾張の繊維と同じことがいま、三河で起こっている。三河は自動車関連の産業集積では世界一だと思う。経産省がしっかりと手を入れないと壊れていくだろう。別添資料で、日本の置かれている立場を考える数字をあげておいた。GNI は最近よく使われる国民総所得、GDP は国内総生産。GNI を GDP で割る。ものづくり輸出立国は、90 前後、100 を切っている。その逆、極端なのが日本である。2000 年は 93.9 でものづくり日本の名残りがあがるが、それ以後、小泉・竹中の構造改革が進むと 110 を超えてしまった。国内でつくったよりも所得が多いということは、外国で儲けたカネが日本に戻ってくるということ（移転所得という）。だからアベノミクスでおカネをジャブジャブ出しても国内の生産力を上げることに寄与するかは不確かである。アメリカ、ドイツも 100 から大きく離れていない。DNI と GDP を一致させようという潜在的な意図がある。いまカネをばらまいても設備投資に回るといったことはないだろう。

## 7. 毛織物業集積都市の衰退・解体と街づくり戦略の再構築—地方中心都市か、名古屋圏の有力衛星都市か—

- ・産業の集積が崩れると、身近なところに仕事を頼むという関係が成り立たなくなる。これは、コストを超えた問題である。これだけの集積関係は世界のどこにでもあるわけではない。毛織物では、イギリスにはもうない。イタリアのプラートも衰退している。
- ・一宮の先々を考えた場合、戦略として毛織物の集積が取り戻せるのか、そして毛織物と濃尾平野の中心という両翼のドッキングが上手くいくかひとつの課題である。もうひとつは、名古屋大都市圏の中でマンションのまちとして、なるべく所得水準の高い人を呼び込むという戦略である。
- ・ただ、名古屋自体はまとまって、周りは面倒見切れないということになれば、名古屋依存のまちづくりは難しい。やるならばもっと前にやっておくべきだったこととして、例えば、東海道線の駅。大正ぐらいから、名古屋から岐阜の間に駅がひとつも増えていない。岡崎の方、中央線、関西線はだいたい 2.5km から 3km 間に

駅が作られてきた。駅をつくと、土地利用のシステムが変わり、使用価値が変わる。また、地価が変わり、交換価値も変わる。資産価値が高くなれば担保能力が高くなるから、新しい事業をする基礎になる。金融資本の時代ということでは、やる気のある人にはいろいろな可能性が出てくる。戦略ということについて、現在の一宮は、あまりにも貧困であるという感じがする。

- 中心都市として考えていく上では、1ページの1が参考になる。ドイツの都市は、地域社会全体の中でのポジションを決めて、国の援助でつくっていく。このように見れば、一宮の駅ビルの評価も変わってくる。大きな広場は使用価値ではいいが、駅前の最高の場所で、広場と駐車場と図書館で果たしているのか。これでは都市の活力として成り立たないとすれば、空いているところにもっと活力を生み出すものを持ってくる必要がある。また、廃止される競輪場の跡地は最後に残された場所である。産業あるいは国の施設など、どういうベーシックな機能を持ってくるのか。切り売りしたら元も子もない。さて、どうすればいいだろうか。

### 【質疑応答】

#### ●毛織物産地の集積形成から、衰退過程について（講義補足）

- 世界的な繊維の集積するまちに発展していったのは、濃密な取引関係があり、商売がやりやすかったからと理解した。（聴講者）
- 少し補足する。本町をつくったのは豪商。豪商とは、大きいだけでなく、カネも出し、口も出し、知恵も出す、この三つが兼ね備わっている者。農村で言えば豪農。そういった人たちが、一宮の場合、毛織物にシフトするとサボり始めた。経済のことは毛織物に任せればいいと。
- 地図を見ればわかるが、織物をやっているのは、木曾川の川筋。かつて洪水で被害を受けているところで、土地も狭く、労働力の余っているところ。起、奥町がものづくりの中心である。今でもそうである。そこに目をつけたのが大阪商人。バイタリティのある大阪商人は、産地をひとつ作るだけの力を持っていた。例えば洋服に着ているピラピラの細幅織物がある。これは大阪商人が福井の小さな城下町、丸岡に持って行って植え付けたものである。切っ掛けは、イギリスから輸入していたものが第一次世界大戦で入って来なくなって、国内で間に合わせなければならなくなったこと。スーツ地は毛織物の知識のある一宮にやらせた。丸岡の方も、見本はこうだ、機械はこうだとやったら産地になった。金沢の北にある漁港の高松というところでは、パンツのひも、ゴム入り織物。魚が取れなくなっていた網元へ持ち込んで、産地になってしまった。眼鏡のフレームで全世界で有名な鯖江も大阪商人が持ち込んだもの。このような経緯で産地になっていた側面が強い。ナンキン袋のような毛織物はできるが、問題はそれをスーツ地に仕上げる染色、整理、仕上げが難しい。これを青島にいたドイツの居留民から学び、かなり苦勞したが克服してスーツ地の産地となった。
- グローバル化の中で大事なことは、企画力、デザイン力、技術力など、一番の大本を本国で握っていること。例えば、ハングライダーは、ドイツ、スイスの業者がやっているが、実際に作っているのは中国。
- 本町商店街の古い商人たちが、まちを管理し、維持し、経営することをやめ、とにかくメシが食えればいい、財産もあるし、土地もあるということになった。これがまずかった。いわゆる寄生地主制。カネが儲かったら、田舎の農地を買って小作料を取る。小作人が死んでも構わない、小作料さえ取ればいい。これが明治以降の商人の行動パターン。これは今の株主資本主義とよく似ている。いまは株主が一番偉く、労働者、経営者は関係ない。配当を高くしてくれればよく、配当がなくなったら売り逃げる。寄生地主制がいけないと言うなら、株主資本主義もダメだと言わなくてははいけない。せめて10年は株を保有して、知恵を出して株主の責任を果たせと言わなければいけない。
- 起、奥町で始まったが、東海道線沿いの一宮に日紡、東洋紡、片倉などの大きな繊維工場ができて繊維商社ができる。しかし、買継商人は手数料稼ぎ。要するに自己責任で仕入れて、相場を見ながら販売するような本物の商社、問屋が弱かった。これが大きい。自分の責任で商売できるほど、商業資本が大きくならなかった。大阪の指示に従っていた。本町筋の豪商が、繊維の商人に肩代わりをしてもらおうと思った時に、繊維関係の商社がそこまで成長しきれなかった。それは、戦前の日本の経済学者は、商社にくっついて仕事をするのは悪いと言っていたことも関係している。問屋制家内工業で商人に搾取されるという。しかし、責任を持って企

画し、営業する役割のセクションは、イギリスもドイツもイタリアもどこも手放していない。

- ・いま、市役所と商工会議所がタイアップしてひとつのことをやろうとしていない。これでは中心性を保っていくことは不可能である。現代資本主義の中で一宮を考えるならば、国を頼らない、県を頼らない、それぐらゐのエネルギー、才覚のあるリーダーがいないとダメだろうと思う。現状は、市民のやって欲しいことをやっていけばよいということだろう。しかし、民主主義社会には、多数意見が正しいという保障はない。少数意見の中から、本当の知恵を見つけ出していく才覚が市民の中に必要である。市民は風にそよぐ葦ではなく、直立して頑張る葦が近代社会の市民である。

#### ●ものづくり再生における共同／協同の難しさ

- ・起や奥町が繊維の産地として発展する過程で、自分たちの責任で取組むかたちとして協同組合が機能している。協同／共同ということが、現代資本主義に対抗していく重要な視点になるのではないか。(今枝)
- ・難しいところである。最近、コミュニティの再生が議論されている。これは仲良しクラブではなく、そこに属さなければ死んでしまうところから来ている。これから 21 世紀の普通の市民レベルで問われていくのは、自分は若干、損をしてでも、そういうことに少しずつエネルギーを出しながら、自覚的に全体のメンバーを掌握して、身の回りで共同体社会を小さく作っていく。これが共同体、コミュニティづくりのスローガンになっている。昔のように無意識にできるのではなく、自覚的にエネルギーを出していくことが重要である。これが、ものづくりで成り立つかどうかは難しい。なぜなら、利益を供出しなければいけない。利益を最高に出して、やっと生活しているという苦しい中で、利益をはき出せるかどうか。つまり、はき出し部分が税外負担になる。そうでなくても、所得税、法人税、消費税は取られる。そうなると、協同体／共同体にどこまで費用、エネルギーが割けるか。例えば、それをやらなければ国が減びるとしても、自分が生き延びればよいということが成り立つ時代である。だから難しい。

#### ●環境を活用して発展した一宮

- ・私の住む江南では養蚕が盛んであった。尾張藩の政策もあるだろうが、木曾川扇状地の土壌の影響で、砂利が青物生産には適さず、水はけがよいので養蚕、綿花になったという、自然地理的な面を利用して一宮の集積が進んだという面があるのではないか。(聴講者)
- ・地理学には、自然環境決定論と自然環境可能論があり、いま言われたのは前者で、これはドイツ地理学の源流にある。フランス地理学は環境可能論で、そういう条件を認識して、そのまま受け入れて順応するか、それにお金と労力をかけて改良しながら別のことをやるのは人間の選択の問題という考え方である。それを下敷きにして言えば、犬山扇状地は養蚕で、起は綿花。両方とも尾張藩の端っこ。小物なりと言って、年貢の本体ではない。米を作らないところは2等地、3等地。洪水でどうなってもいいところ。養蚕と綿花では土壌がちよっと違う。養蚕は扇状地、綿花はもう少し細かく泥的。犬山扇状地の養蚕の発達は、明治以降のこと。生糸による外貨獲得のために、桑を植えられるところに片っ端から植えた。ここで養蚕が大きくなったのは世界恐慌まで。その後、全国で生糸を買ってもらえなくなった。濃尾平野はまだよかった方で、できなくなったところはどうしたかという、ブラジル移民、からゆきさん。いまの地理学の考え方は、自然条件で決まるというより、総量を評価して、活かすか殺すかは人間の問題であるというものだ。

#### ●都市化社会における空間編成議論の欠如

- ・いまの都市化社会では、コミュニティと周りの環境が空間的に一体となっている。コミュニティの自主独立性が壊れている。昔のように、周りの農地から食糧を調達するかたちではない。消費生活を中心とした共同性の観点から、それを快適にするような空間編成、それは個々の家だけでなく、道路、公園、鎮守の杜なども含むが、その組合せ、利用の仕方などがきちんと議論されていない。

以上